

継承日本語話者散在地域に住む家庭のファミリー・ランゲージ・ポリシー

佐野 愛子
(立命館大学)
吉田 美穂
(弘前大学)

要旨

散在地域における継承日本語の修得は、補習授業校などの教育資源が限られているために集住地域に比べてさらに困難さが増すことが指摘されている。本研究では、カナダの地方都市 X 市の継承日本語家庭を対象にインタビューを行い、自分自身のマルチリンガリズムを極めて肯定的に捉えている子どもたちと、それを支える親たちのファミリー・ランゲージ・ポリシー (FLP) のあり方、及びそれを形づくった要因について考察した。別のコンテキストにおける FLP に関する先行研究と対比することにより、このコンテキストの独自性と、他のコンテキストとの共通性について論じ、そこから得られる教育的示唆と今後の研究の方向性について検討する。

Keywords : ファミリー・ランゲージ・ポリシー, 散在地域, 継承日本語教育, 言語イデオロギー.

はじめに

近年、子どもの言語習得と言語政策二つの研究領域にまたがる学際的な研究領域であり、継承語教育に密接に関わる領域 (King ら, 2008) としてファミリー・ランゲージ・ポリシー (family language policy, 以下, FLP) 研究が広く注目されている。FLP とは、複数言語環境での子育てに関わる家族の家庭内における言語政策を扱う研究分野で、より一般的な国家レベルでの言語政策の研究を踏襲して言語イデオロギー (Language ideology : 特定の言語に対する態度やそれにかかわるビリーフ) , 言語実践 (Language practice : どのようにその言語が使われ, 学ばれているのか) , 及び言語管理 (Language Management : 言語実践を管理するための意識的な取り組み) の 3 つの観点からこれを分析する (Spolsky, 2004) . さらに家族を取り巻く社会や国家の言語政策がどのように FLP に影響を与えているかについても研究が進められている (Smith-Christmas, 2016) .

第一筆者はこれまで CLD 児の保護者が子の言語教育に関してどのような決定をするのか、そしてそうした決定は家庭を取り巻く周りの環境にどの程度、そしてどのように影響を受けているのかを明らかにすべく、カナダ (佐野, 2017) , 香港 (佐野, 2018) , イギリス (Sano, 2020) における継承日本語家庭を対象とした研究を行ってきた。しかし、これらの研究では特に補習授業校を一つの拠点として活用している継承日本語家庭を対象にしており、したがって相対的に教育的資源にアクセスしやすい集住地区に住んでいる家庭が対象となっていた。そのため、継承語教育の中でも、より厳しい条件下にある散在地域での FLP とはどのようなものかという点に焦点をあて、2024 年の夏にカナダの散在地域におけるインタビュー調査を行った。

散在地域での継承日本語に関わる FLP の研究のため、2024 年の夏にカナダ (2 都市) , ドイツ、及びハンガリーで計 14 家庭にインタビュー調査を行い、それらの家庭の言語イデオロギー、言語管理及び言語実践に関して聞きとった。本報告では、カナダ X 市におけるインタビューから浮かび上がった、極めて肯定的なマルチリンガル・アイデンティティの形成に資する FLP とそれを可能にした要因について考察する。

インタビューの概要

インタビューは2024年8月12日にカナダの地方都市X市で小規模の継承日本語学校を運営するA氏の自宅で行われた。事前に筆者らが研究の意図を説明し依頼した国際交流基金(トロント)から紹介していただいたA氏に連絡し、A氏に声をかけてもらう形で参加者を募った。結果として、表1に示す8家庭の19人が、計9時間7分49秒にわたり入れ替わり立ち代わりしながらインタビューに応じてくれた。

表1 インタビューに参加してくれた家族のプロフィール(網掛けがインタビュー参加者)

妻	夫	子			子の学校言語	
A	日本語教室運営者	AH (日系カナダ人)	AC1	女	16歳	フランス語
			AC2	女	11歳	フランス語
B	日本語教室指導者	BH (カナダ人)	BC1	女	19歳	英語
			BC2	男	17歳	英語
			BC3	女	15歳	英語
C		CH (日本人)	CC1	男	2歳	
D		独身				
E		EH (カナダ人)	EC1	女	5歳	
F		FH (カナダ人)	FC1	女	6歳	英語
			FC2	女	8か月	英語
G		GH(カナダ人)	GC1	男	15歳	英語
		ドイツヘリテージ	GC2	男	13歳	英語
H		HH (カナダ人)	HC1	女	12歳	フランス語
			HC2	男	10歳	フランス語

インタビューの結果と考察

インタビューの結果と考察にあたっては、まず、子どもたちが自分自身のマルチリンガリズムをどのように捉えているか概観し、そうした言語観やアイデンティティがどのように構築されたか、親たちの言語イデオロギーと関連付けて考察する。

子どもたち自身の言語観とアイデンティティ

自分自身のバイリンガリズム・マルチリンガリズムに対する自信と誇り。子どもたちの語りで特徴的だったのは、バイリンガル・マルチリンガルである自分についての自信と誇りについての言及であった。他のコンテキストでは、自分の多様な言語的・文化的背景に必ずしも肯定的になれる子どもたちの姿が頻繁に記録されている。特に、残念なことながら、日本に住む外国にルーツをもつ子どもたちが、差別をうけたり、日本社会への同化を強いられたりする事例は枚挙にいとまがない(小張, 2014; 酒井, 2008; 中川, 2011 など)。また、イギリスの補習校でのエスノ

[発話データ1: GC1/GC2 5:49:20-5:52:24]

Sano:	When you make presentations and stuff, do you sometimes feel like you showcase your heritage?
GC1:	Yes, I always put that I can speak two languages and that half of my family lives in Japan. Lots of people seem to find it interesting.
中略	
Sano:	自分がバイリンガルであるということを隠したいと思ったことはある?
GC1:	感じたことない。いつも人にあったら、えーっと、「2つしゃべれますよ!」って。
Sano:	You're always being proud of that, yeah?
GC1:	I always tell them cos people here seem to be very interested in that, cos not many people can. だけど、日本語しゃべれるの、かくしたことない。
GC2:	ほくも同じ!
中略	
GC1:	ぼくは日本に行っても、「英語しゃべれるよ!」って言ってる。えっと、みんなえっと、「ああ、ほんと?!」って。
Sano:	「しゃべって、しゃべって!」って(笑)。
GC1:	そう、「しゃべって、しゃべって! 教えてー」って来るからおもしろいから、いつもあっちでも言っています。

グラフィーを行った Danjo (2015) には、イギリスの学校で日本語を話せることを友達に言うか、尋ねられた子どもたちが口々に「そんなのは変」「頼まれたら話して見せるけどちょっと恥ずかしい」「ほかに誰も分かる人がいないのに日本語を話すなんて意味がない」(p. 151, 拙訳)と否定する様子が描かれている。しかし対照的に、GC1, GC2 の兄弟に自分たちのバイリンガリズムを隠すことはあるか尋ねてみたところ、そうしたネガティブな感情は一切持っていないことを語ってくれた(発話データ 1)。それどころか、カナダでも日本でも、積極的に自分がバイリンガルであることをアピールする、と彼らは言う。より年長の AC1, BC2, BC3 に同様の問いをした時にも、質問自体の意図がよくわからない、という怪訝な表情を浮かべつつ一様に、継承語を話せることに対して否定的な評価を受けた経験はない、と語っている。また、日本に住む外国ルーツの子どもたちが、クラスメートに奇異な目で見られることを回避するため日本語母語話者ではない親に参観日に来てほしくない、と言ったりすることが少なくないとは対照的に、AC2 は英語母語話者でない母を持つことで、多様なアクセントを持つ人に慣れるという利点についても言及している(発話データ 2)。

[発話データ 2: AC2 0:50:07-0:50:27]

understanding other people's accents, I feel, being bilingual, having a mom who's an immigrant, is just easier to understand...

親がマジョリティ言語のネイティブ・スピーカーではないこと自体になにかネガティブな感覚をもたず、こうした肯定的なマルチリンガル・アイデンティティを醸成することは決して難しいことではないということをこれらの語りは示している。

多言語・多文化主義を尊重するカナダの価値観。 子どもたちがバイリンガル・マルチリンガルとして肯定的なアイデンティティを育てていることを確認したうえでさらに、バイリンガルだからこその利点はあると思うかどうか聞いてみたところ、BC2 は次のように、新しい言語を習得するにあたってのバイリンガル・アドバンテージについて言及した(発話データ 3)。

[発話データ 3: BC2 0:47:06-0: :]

I guess when you are leaning a different language, or talking to someone who speaks different languages you can kind of like make connections like languages have their differences like grammar wise... I guess, I feel like if you are bilingual, it's like easier for you to learn a different language.

フレンチ・イマージョンに通っている AC1 や AC2 も、この点について自身の体験から補強し、文法が非常に異なる日本語と英語を使うバイリンガルであったことでフランス語の習得に際しては特に困難を感じなかったことを説明している。ここで興味深いのは、3 名とも「日本語」と「英語」という特定の言語を話せることの利点について述べているのではなく、多言語話者であることの利点について語っていることである。この BC3 を含めたこの 4 名は、自分のキャリアに日本語を活用する予定はあるか、との質問には即座に否定している。これは、この調査を行った X 市が、トロントやバンクーバーなどカナダの大都市からは遠く離れているという地理的要因もあるかもしれない。実際に日本語を仕事に使う場面が身の回りにはあまりないことが、そうした道具的価値を特に日本語に見出さない理由であると考えられる。この点は、日本語や英語の習得がビジネスやキャリア選択に直結する、と考える香港の継承語学習者とは極めて対照的であった。キャリア選択において特に目立ったアドバンテージを感じていないその一方で、「自分が親になって子どもができたなら、日本語を教えたいと思うか？」との問い(0:40:41)には 4 名ともそう思う、と即答し、その理由については「僕のお母さんとしゃべれるから (BC2)」「なんか、identity になるから (BC3)」「It feels important, tradition? (AC1)」などと答えた。自分自身の日本語の運用能

力がそこまで高くないのではないかと、という不安をのぞかせる者 (AC1, GC1) もいたが、こうした日本語・日本文化を次の世代へ継承したい、という態度は、すべての子どもたちに共通して見られた。こうした道具的動機付けとは全く無縁のところ、自分のアイデンティティを尊重したいという想いや家族とのつながりを重視することが継承語学習継続の強い動機づけになる点がX市の子どものインタビューでは特徴的に表れている。

さらに印象的だったのは、特に AC1 や AC2 の姉妹には継承語である日本語だけでなく、カナダのもう一つの公用語であるフランス語や、たまたま「ドレスが可愛いから」と言う理由で始めたウクライナ・ダンスなど、様々な言語や文化に対して垣根が低く、それらを楽しむ姿勢が鮮明だったことである。ウクライナ・ダンスに関しては、この姉妹が始めたことをきっかけに、他にも継承日本語の家庭が参加するようになり、最初はなんで日本人がウクライナ・ダンスをやるのか訝しがられたこともあったが、今ではカナダでウクライナ・ダンスをするチームの中に日本にルーツのある子どもたちのグループがあることに誰も違和感を持たなくなるまでになったことを話してくれた。フレンチ・イマージョンの選択同様、ルーツがあってもなくても、自分が興味を持ったならその言語や文化を学ぶことにためらう必要などない、という多文化共生のカナダの空気をこの姉妹は体現しているようであった。

比較事例としての香港の継承日本語話者の語り。 ここで、比較のために、カナダ同様マルチリンガルが多数存在する香港の調査 (佐野, 2016) で得られたデータを参照したい。香港の調査データにおいて際立っていたのは、複数言語環境に育ったのにマルチリンガルになっていないことを「失敗」とみる社会的なプレッシャーである。例えば、日・英バイリンガルの母と広・英バイリンガルの父をもち、カナダで生まれて2歳で来港した香港の大学生は、中3で自らの意思で日本語学校へ行くようになったことを明かし、その理由について以下のように説明している。

まあ、母は…。例えば、母または父が日本人なのに、日本語上手に話せ…ない、という…。他の人からプレッシャー受けて…「どうして母日本人なのに、日本語できないんですか？」と聞かれたこともあります。

(佐野, 2016 より)

同様に広東語・北京語を話し、日本への留学経験を持つ母と、日本語・英語・広東語・北京語を話す父を持つ別の大学生は、上海に在住していた小学校高学年から、N1取得のための語学学校に通い、14歳でN1を取得した動機について以下のように話している。

そうですね…。実は知り合いの中で私より5年か7年ぐらい年上の、えー、お姉さんがいまして、そのお姉さんは、家庭環境は似てる感じなんです。お父さんが日本人で、お母さんが香港人で、で、あの、お姉さんは香港大学の医学部に合格したんですが、周りの知り合いとかに日本語に関する質問とか聞かれたときに、全く日本語話せないの、あの、大学に入ってから日本語を学び始めたということを知りました。(中略) そういう、あの、かなり微妙な立場に立ってしまったということを、あの、そのおばさんとおじさんがうちの両親と話してるのをたまたま聞き取れたあとに…。はい、少し、そうですね…。自分の未来を心配し始めた。

(佐野, 2016 より)

二人の語りにも共通するのは、片親が日本人なのに日本語が話せないと、「なぜできないのか?」「残念だ」と社会から見られてしまうことへの不安が、継承日本語学習の大きな動機づけとなっている点である。さらに、この二人目のインタビューは、香港生まれであるが、両親の方針で日本語を教授言語とする幼稚園に通い、小2から中2までは上海語を用いる環境で北京語の学校に通いつつ上記インタビューで説明したように日本語学校に通い、帰港後は英語を教授言語とするインターナショナルスクールに通っているが、こうした教授言語の異なる学校のスイッチや、家庭での使用言語、学校の教授言語及び習い事での使用言語などを意図的に変えるということは、

このインタビューが特別というよりも、香港のマルチリンガル家庭においては非常に頻繁に見られる FLP である (佐野, 2017)。その背景には「複数言語環境に育った子どもはマルチリンガルになることが当然である」というナラティブが強く社会に浸透していることがある。

子どもの語りのまとめ. 本節では香港でのインタビュー調査と対比しながら、X 市の子どもたちが自分たちのマルチリンガリティに自身と誇りを持ち、特に道具的価値を見出していないにも関わらず積極的に次の世代にも引き継いでいきたいと考えていることを明らかにした。「バイリンガル FLP の成功 (Successful Bilingual FLP)」とは何か、という議論が展開される中、母語話者のような運用能力をマジョリティ言語と継承言語二言語で獲得できること、とする画一的な観点を退け、「本当に幸せなバイリンガルの子どもたちをどのように育てるか (*how to bring up truly happy bilingual children*; Schwartz & Vershick, 2013, p. 7, italics in the original)」という見方をとるなら、このインタビューに参加してくれた家庭の FLP は見事に「成功した」、と言うことができよう。Kopeliovich (2013) が Happylingual approach と呼ぶ子ども中心主義の FLP がここには見られる。

親たちの語りに見られる言語イデオロギーとそれを支える要因

FLP に関わるインタビューを依頼する際、しばしば直面するのは「うちのバイリンガル子育ては失敗だった」「バイリンガルというようなレベルには達していませんから」というような、自分の家庭における FLP の実践に対するネガティブな振り返りであるが、今回の X 市のインタビューではそうした否定的なコメントが見られなかった点が極めて特徴的だった。これは、今回インタビューした家庭が、全て自分たちが希望し、想定したとおりに子育てをしてきた、という自信にあふれている、ある意味特殊な家庭ばかりだった、ということではない。実際、B 氏も、「はじめはほんとにバイリンガル! と思ってた (1:26:12)」と振り返りつつ、途中で長女 BC1 の反発が強くなって方針を切り替えた、と明かしている。継承語学習におけるこうした目標設定の変更は、これまでの研究でも記述されているが (後藤田, 2009; 柴山ら, 2016; Noguchi, 1996)、多くの研究では目標変更をしなかった家庭を「成功事例」として扱い、逆に目標を変更したことに対し「失敗」であるとか、「あきらめた」というネガティブな評価をしている。しかし、B 氏は、当初は自分が指導者として教える教室で長女に学ばせていたが、お互いストレスになっていく状況を見て、長女を小さい子の教室にアシスタントとして派遣することに切り替えた。そのうえでこう語る。

[発話データ 4: B 氏 1:27:45-1:27:59]

そこから日本語が伸びたか、というかわからないけれど、嫌いにはならなかった。嫌いになったら負けですから (笑)。これは一生続いていく道だと自分で思っているんで…

この語りに現れるのは、ある一定の日本語の運用能力に到達できたか否かで継承語教育の成否を評価するのではなく、重要なのは継承語へのポジティブな態度を持てるか否かである、というビリーフと、継承語教育の成否について評価するのはずっと先であるべきだ、という二つのビリーフである。これは「ネイティブ・レベルの日本語を身に着けられなければちゃんとしたバイリンガルではない」というようなよくある言説に強く対抗するビリーフであり、かつ「言語教育は〇歳までにしないと手遅れになる。」というような強く社会にはびこる言説に対抗するビリーフである。以下のセクションでは、こうした肯定的なマルチリンガリズムに関わる親たちの言語イデオロギーは、どのように形成されたのか、特にこの継承日本語教育機関の運営を担い、このコミュニティの中核にいたことが観察された A 氏・AH 氏と B 氏の語りを中心とし、先行研究と比較しながら考察したい。

自分を育ててくれた親の子育て方針に対する肯定的な評価. FLP の言語管理の手法として最も広く浸透しているものとしては One-Parent-One Language (OPOL) ポリシーが挙げられるだろう。Barron-Hauwaert (2004) によれば、このコンセプトは、フランス人言語学者の Maurice Grammont

が 1902 年に出版した“Observations sur le langage des enfants [子どもの言語発達]”という本の中の“une personne; une langue [一人一言語]”として書かれたものに端を発するという。一言でまとめればこれは、言語分離のイデオロギーに基づくもので、二つの言語を厳格に分け、一方の親がある言語のみで話し、もう一方の親が別の言語で話すことを徹底すれば子どもはバイリンガルに育つ、というバイリンガル教育の戦略である。この戦略は国際結婚家庭では広く浸透しているものであるが現実にはその厳格な実践は難しく、多くの継承語家庭はその挫折に直面することが報告されている (Takeuchi, 2006; Noguchi, 1996)。

OPOL の実践が広く推奨され、国際結婚家庭であれば当然のように実践を試みられるのが主流となっている (Takeuchi の研究ではインタビューした 25 家庭全てが実践を試みている) 中、A 氏は、その厳格な運用には当初から疑念を持っていた。A 氏は長女が生まれる前から日本語学校に関わっていたがその中で、カナダ人男性と結婚している日本人母で、とても厳しく継承日本語の学習を押し付けている事例を見たことを説明して次のように述べている。

[発話データ 5: A 氏 1:52:20-1:52:35]

すごい、親のエゴだなんて思ったんです。(中略)もう、こうやって日本ぐるみの、その、家族の集まりでも、「絶対日本語で話さない！」って玄関先で言うとかね。私、個人的にもう、それはしたくないなって思ったんです。(中略)押し付けたくない。押し付けることで negative な、あ、う、結果になっている家族も見えてきて…。

ここには、継承語教育よりもっと根源的な、子育てについての A 氏の信念が垣間見える。A 氏はさらに、上の子と下の子は、生まれた月によってクラス内での早生まれ、遅生まれといった位置づけも違うし、性格も違う、自分はその子その子の選択を重視してきたと話す。A 氏は、自分の親が基本的には自分の選択を尊重してくれたことを述べつつ、自分の子育ての指針について次のように語る。

[発話データ 6: A 氏 1:56:39-1:58:15]

器になる部分っていうのは与え続けて、チャンスはあるよ、今どうする？あとにする？いつでもいいよ、あなたの choice であなたの人生だから、お母さんは自分の choice で日本で生まれて育ったけどこっちに来て、ここが好きだからここに住んでる、だからあなたたちも自分で選んでいけばいい。

子ども自身の選択を尊重する親の教育方針で育ち、生きてきたことに A 氏自身が満足し、その子育てを自分自身の子育てのモデルとしてきたことがこの語りにはよく表れている。

A 氏の非束縛的な FLP とはある意味対照的に、日系カナダ人の夫 (AH) は「子どもには母語話者のように日本語を話せるようになってほしい」という願いを強く持っている、と言う。ただし、FLP の強度としては違いがでているものの、子どものマルチリンガリズムを最大限にのばしてやりたいという AH 氏の願いもまた、親の子育ての結果としての自分の人生への満足感に起因するようである。AH 氏の父は移民してきた祖父母のもと、バンクーバー生まれでカナダ国籍をもっていたが日本育ちで、大学卒業後にカナダに戻ってきた後英語で非常に苦労した。日本語は流暢であり、また AH 氏の母は日本人だったため、AH 氏自身は幼い頃トロントで継承日本語教育をしっかり受けてきたという。日本語の方が強い日系カナダ人、という特殊な言語環境にあった父と、移民としてカナダにきたばかりの母がともに言語習得に苦労しながら子どもである AH 氏を懸命にバイリンガルに育てた努力に AH 氏は深い感謝を語り、自分の子どもたちにも同様に他の言語を学ぶ機会をあげたかったし、子どもたちが実際にフランス語や日本語を学んでいることがすごくうれしい、と語っている。

マルチリンガルな環境で培われた言語観。 親が自分に対してしてくれた子育てのあり方とは別に A 氏らの言語イデオロギーの形成に影響を与えたものに、マルチリンガルな環境での自身

の経験がある。A氏は自分が出会ってきたマルチリンガル話者について紹介しながらこう述べる。

[発話データ 7:A氏 1:52:20-1:52:35]

このカナダ人の旦那さんで日本人と結婚された方を見るとペラペラぐらいね、しゃべれる旦那さんも多い、それはやっぱり大学で日本文化に興味をもって、ぐーっとう、言語習得された…そういうカナダ人を見てるから。(中略)別に私たちの子どもがそういうふうになっても、私は全然もう、日本人のプライドとかも何もない(笑)。

この語りから明らかになるのは、A氏の窮屈過ぎないFLPが、言語教育に関わる経験や観察に支えられて形成されていることである。大人になってからの第二言語学習に成功した事例を見てきたことは、「子どものうちに言語を習得させなければ手遅れになってしまう」というような言説からA氏を解放し、逆に子どもの意思を無視した押し付けの負の影響について考える基盤となっている。ここでA氏が「そういうふう」と言っているのは、例えば外国人風のアクセントがあったり、語彙に制限があったりして、いわゆるネイティブ・レベルではない日本語を話すことだと考えられる。「日本人のプライド」などない、と言うのは、「自分が日本人なのだから自分の子どもは母語話者と同じレベルで日本語を使えるのが当然である」という考えを指しているだろう。こうした考えは、無批判に広く受け入れられ、規範化している言説であるといえるが、A氏がそうした根拠のない母語話者規範からは自由であることをこの語りは端的に示している。

A氏のこうした言語習得観の獲得は、子ども時代に自身を含め、多言語環境で育つ友人が少なくなかったことと関係しているかもしれない。A氏は3歳の時に家族に帯同してドイツに行き、11歳までの7年間をそこで過ごしている。最初はドイツ語を使う幼稚園に入り、ドイツ語を話していたが、小学校入学時点で日本人学校を選択し、その後は週1度のドイツ語の授業もあったので少しは習ったが、基本的に日本語環境で育った。帰国後は英語への関心の方が強くなり、結果としてドイツ語の習得はそこで止まったという。同時に、当時の友人の中ではインターナショナルスクールに通うことを選択した人や、ドイツに残った人などもおり、同じ環境にあっても言語習得には様々な選択肢があり、様々な結果につながることを実感として持っていることが、「日本人の子どもは日本語を話す」という短絡的な思い込みからA氏を遠ざけたと考えられる。

A氏の夫である日系カナダ人のAH氏も、子ども自体を過ごしたトロントの友人たちの多くが、それぞれの継承語を一生懸命学んでいたことで自分が土曜日に日本語を勉強することを特に嫌だと感じなかったと述懐する。中には日本人とギリシャ人のハーフで、土曜日は日本語、火曜日と木曜日はギリシャ語の学校に通っていた友達もいたこと、しかもその友達は、学校でフランス語も勉強し、さらに結婚した相手がチリ人だったのでスペイン語も習得したことなどを思い返しつつ、マルチリンガルな友人が大勢いた環境に育ったこと、そしてそうした環境に育ったことで、自分の子どもたちにも多くの言語を学べる環境を与えたい、と考えるようになった、と述べた。

こうした、マルチリンガルな環境で生きてきた経験がフレキシブルなFLPにつながっている例は、先行する研究の中でも見られている。例えばカナダの大都市における継承日本語家庭を対象にした佐野(2017)の報告の中には、自分自身日本語を継承語として学んだ経験をもつインフォーマントが登場する。家庭内における日本語の使用を死守した他の3名のインフォーマントとは対照的に彼女は子どもが8年生もしくは9年生(日本における中2ないし中3)くらいになった時点で、家庭内言語に関するルールを次第に緩和していったことを次のように説明している。

それまでは結構その、彼女(娘)が小学校の時に、6年生、7年生、8年生の時事問題でサブプライム・モーゲージの話とか、そんなこと言われても日本語にしても分からないじゃないですか。「まず銀行でお金を借りたらね」とか言って、すごく自分で日本語でそれを子どもに説明するの、すごい自分で苦労した記憶もあるんですね。でも今はそういう苦労が無くなったので「分からない。」っていうのは英語で説明しても、かみ砕いて英語で説明すれば「ああなるほどね。」って分かってくれるので。

(佐野, 2017より)

この例は、自身もバイリンガルであり、継承日本語を学んだ経験のある母親が、効率のよいコミュニケーションストラテジーを積極的に導入していった事例として捉えることができる。同様に、Sano (2020) のインフォーマントも、家庭での継承日本語の使用について重視しつつも、リテラシーの習得も同様に、もしくはそれ以上に重視した結果、読書経験の共有の方法を変更し、親子が同じ本を日本語で読む方法をやめて、子どもは英語で、親は日本語で同じ本を読み、それについて語り合う時間を大切にすることを紹介している。自分自身がマルチリンガルであった親や、マルチリンガルに多く囲まれて生きてきた親は、フレキシブルな言語観・言語習得観を培い、結果として FLP もフレキシブルなものになっていくと言えるかもしれない。

家族の中のマルチリンガリズムが作り出す受容的な環境。 カナダ人の夫の日本語運用能力も、A 氏と B 氏の FLP に影響を与えている。前述のように A 氏の夫 AH 氏は日系カナダ人で、幼い頃はトロントで育ち、継承語教育に熱心な家庭で育てられており、日本語も非常に流暢で、A 氏とは日常的な会話は日本語で行っている。B 氏の夫 BH 氏は日本語に興味をもち、B 氏曰く「初級は終わって (1:22:38)」いるという。この点について B 氏は次のように振り返っている。

[発話データ 8: B 氏 1:22:44-1:23:15]

だから日常生活で私たちが、私が子どもを育てていくのに家庭内で子どもに話しているようなレベルのことは全部わかる、それも私には安心感がありました。

特に国際結婚家庭で、夫婦の一方のみが継承語を理解する場合、厳格な OPOL の実践によってマジョリティ言語話者の親が疎外感を持つという事例はこれまでもたくさん報告されている。家族の関係性を犠牲にしてまで継承語教育を進めるべきかどうか悩む必要がないということは、A 氏や B 氏にとって継承語教育実践のハードルを下げる方向に働く要因だった。

OPOL の実践と家族間コミュニケーションのジレンマは、祖父母を含む大家族においてはさらに顕著になりがちである。ただし、カナダのような多言語環境では、祖父母世代と孫世代で言語が異なること自体珍しくないため、この点も大きな問題とはなりにくいようである。自分自身ごく初歩的な日本語しか理解しない GH 氏に、日本語が分からない両親は日本語を使った子育てについてネガティブな態度や意見は持っていなかったのか聞いたところ、以下のように答えた。

[発話データ 9: GH 氏 6:03:10-6:04:19]

No, because I think my mother had to deal with my father's parents exclusively speaking in German. [...] So I think maybe that helped my mother accept their speaking in Japanese to each other. But I also think we said from the beginning, too, that we want the conversations between the children to be in Japanese just to maintain the knowledge and the heritage, and they were understanding.

GH 氏の祖父母がドイツからの移民であったため、GH 氏の母（子どもたちにとっての祖母）は自分が理解できない言語が家族内のコミュニケーションに用いられることに慣れていて、と GH 氏は説明する。事前に継承語を保持するための教育方針を伝えていたこともあって、そこに問題は生じなかったと GH 氏は語っているが、ここには移民大国であるカナダの社会の特徴が良く出ていると言えるだろう。佐野 (2016) にも同様の例が報告されているが、家族の中の移民体験が珍しくなく、世代を超えて多言語家族として生きること自体への慣れがあるからこそ、家族内の多言語コミュニケーションを受け入れやすい部分もあるだろう。

言語教育機関を越えた親たちのつながり。 ここまで、主に A 氏と AH 氏、及び B 氏の語りを中心として親世代の FLP に影響を与えた要因を考察してきた。A 氏自身英語に堪能であり、夫の AH 氏は日系カナダ人であるため、A 氏の家庭はカナダにおける継承日本語教育の文脈では言語的資本が強い環境であるといえよう。さらに A 氏と B 氏は子育ての長い期間、共に助け合ってきた

た仲間であり、その子どもである AC1 と BC2 は親友であり、そのほかの子どもたちも年齢の差に関わらず非常に仲が良く、まるで家族のような関わり方をしていた。こうした安心感のある核があることで、新しく X 市に来る日本人たちも、単なる継承語学習機関としてではなく、コミュニティとして集まってくる。ここに来れば思う存分日本語で話せることや、親や兄弟から遠く離れた地で、困った時に頼れる仲間がここにいること、長く厳しい冬で子どもを外で遊ばせられない時に互いの家を行き来することで乗り切ること、習い事などの情報を共有することなど、実に多くの機能を、この A 氏と B 氏が核となるコミュニティが担っていることを、インタビューに参加した人々が異口同音に語っていた。このインタビューが、A 氏の声掛けで 8 家庭の 19 人もの参加者を得たこと、9 時間以上にも及ぶインタビューの間、子どもたちも含めて自由に出入りし、食べたり飲んだりしながら続けられたこと、ティーンエイジャーの子どもたちが面倒がることもなく喜んでインタビューに参加してくれたこと、日本語を話さない GH 氏も喜んでインタビューに参加してくれたこと、そうした空気感すべてが、このコミュニティの強さを物語っていた。そしてこのコミュニティの強さ自体が、日本語・日本文化継承についての子どもたちの肯定的な受容の基盤になっていることがうかがわれた。

結語

本研究では、教育資源に限りがある散在地域での継承語教育を行いつつも、子どもたちが自分たちのマルチリンガリズムに自身と誇りを持ち、親たちもそれに満足できているという意味で極めて成功した FLP の背景にある要因をインタビューの語りを通じて考察した。その結果、「多言語・多文化主義を尊重するカナダの価値観」が子どもたち自身に直接影響を与えていること、親たちの FLP が束縛的ではなくフレキシブルであることがその背景にあることが浮かび上がってきた。さらに親たちの語りから、なぜ彼らがそうしたフレキシビリティの高い、緩やかな FLP を獲得できたか考察したところ、①自分を育ててくれた親の子育て方針に対する肯定的な評価、②マルチリンガルな環境で培われた言語観、③家族の中のマルチリンガリズムが作り出す受容的な環境、及び④言語教育機関を越えた親たちのつながり、という 4 つの要因が見えてきた。特に②については近年の他の研究でも同様の結果が報告されている。これまでは、保護者自身がその家族の中で初めて複数言語環境に生きることになった場合の FLP 研究が多かったが、今後、保護者自身がマルチリンガルである家庭の継承日本語教育に関わる FLP 研究が増えていくことが予想されるし、また期待される。③については、移民を多く受け入れ、教育現場でも多文化共生教育に力をいれるカナダと言う社会の在り方そのものに起因する部分であって、他のコンテキストに簡単に応用するわけにはいかないかもしれない。しかし、逆に、こうした受容的な社会環境ではないコンテキストで継承語教育を行う家族がより難しい状況に直面しうることを改めて考えさせるきっかけとできるだろう。本研究で最も教育的示唆を与えてくれるのは④についての考察かもしれない。言語習得のための場を確保することだけで継承語家庭の FLP を支えていくのではなく、コミュニティとしての強い結束をどのように確保できるのか、その重要性を今回の分析は示している。

謝辞

本研究は 科研費 20K00731 及び科研費 20K02579 の助成を受けたものです。

本研究の実施に当たっては、独立行政法人国際交流基金 関西国際センター 所長 真嶋潤子氏、同基金日本語国際センター 根津誠氏、同基金トロント日本文化センター所長 山本訓子氏に多大なご協力をいただきました。ここに記して感謝を申し上げます。また、匿名性の担保のためお名前を記載することはできませんが、インタビューにご協力下さった 19 名の皆様、とりわけ素晴らしいホスピタリティで私たちを受け入れて下さった A 氏に心からの感謝を申し上げます。

引用文献

- 小張順弘 (2014) 「「外国にルーツを持つ」日本人大学生のアイデンティティ形成過程：ことばとアイデンティティの関係から」『国際関係紀要』23 卷1・2 合併号, 155-180.
- 後藤田遊子 (2009) 『英語が苦手な日本人』からの解放：オーストラリア在住、国際結婚日本人女性たち」河原俊昭・岡戸浩子 (編)『国際結婚 多言語化する家族とアイデンティティ』pp. 141-175. 明石書店
- 酒井アルベルト (2008) 「在日南米コミュニティにおけるシンボル化された言語：ライフストーリーとエスニック・メディアの言説から」『日本オーラル・ヒストリー研究』4 号, 85-105.
- 佐野愛子 (2016) 「多言語社会香港で育つ日英作文力」北海道英語教育学会・日本コミュニケーション学会北海道支部・大学英語教育学会北海道支部三学会合同研究会 (2016/3/16) 発表資料
- 佐野愛子(2017) 『金の卵を潰さない』—高度バイリテラシーを支えるために親たちが家庭でしていること—『北海道英語教育学会 紀要』16 号, 35-50.
- 佐野愛子 (2018) 「複数言語社会香港における継承日本語学習者の多様な言語学習環境」『東アジア圏の複言語主義共同体の構築—多言語社会香港からの示唆—研究成果報告書』98-124.
- 柴山真琴・ピアルケ (當山) 千咲・高橋登・池上摩希子 (2016) 「子どもの言語習得とグローバル化時代のインターフェース：海外居住の国際家族におけるバイリテラシー実践を手がかりに」『発達心理学研究』27 (4) 357-367.
- 中川康弘 (2011) 「ベトナム難民 2 世の語りにもみるバイリンガル育成の可能性：ライフストーリー・インタビュー手法を用いて」『母語・継承語・バイリンガル教育 (MHB) 教育』7 号, 66-86.
- Barron-Hauwaert, S. (2004). Language strategies for bilingual families: The one-parent-one-language approach. *Multilingual Matters*.
- Danjo, C. (2015) A critical ethnographic inquiry into the negotiation of language practices among Japanese multilingual families in the UK: Discourse, language use and perceptions in the Hoshuko and the family home. Doctoral thesis, Northumbria University. Retrieved August 16, 2020, from <http://nrl.northumbria.ac.uk/27269/>
- King, K. A., Folge, L. & Logan-Terry, A. (2008) Family language policy. *Language and Linguistics Compass*, 2, 1-16.
- Kopeliovich, S. (2013). Happylingual: A family project for enhancing and balancing multilingual development. In M. Schwartz & A. Verschik (Eds.), *Successful family language policy: Parents, children and educators in interaction*, pp. 249-275. Springer.
- Noguchi, M. (1996). The bilingual parent as model for the bilingual child. 『別冊政策科学』立命館大学 245-261.
- Sano, A. (2020). Successful family language policy in fostering children's biliteracy: Focusing on the parents of heritage language speakers in the U. K. *BATJ Journal*, 21, 4-19.
- Schwartz, M. & Verschik, A. (2013). *Successful family language policy: Parents, children and educators in interaction*. Springer.
- Smith-Christmas, C. (2016) *Family language policy: Maintaining an endangered language in the home*. Palgrave Macmillan.
- Spolsky, B. (2004) *Language policy*. Cambridge University Press.
- Takeuchi, M. (2006) The Japanese language development of children through the 'one parent-one language' approach in Melbourne. *Journal of Multilingual and Multicultural Development*, 27 (4), 319-331.